

## (9) 眼科

### 概要、特色

眼科は乳幼児から成人までの眼疾患全分野において、最新の機器を備えて専門的診療を行っている。扱う疾患は小児期に特有の未熟児網膜症、難治性網膜硝子体疾患、遺伝性眼疾患、先天白内障、先天緑内障、網膜芽細胞腫、斜視・弱視、涙道・外眼部疾患に対して、全国からの紹介患者を受け入れ、最新の機器を備えて診断・手術・リハビリに取り組んでいる。近年、重症未熟児網膜症、乳幼児の難治性網膜硝子体疾患の手術に関しては、麻酔科・集中治療科・新生児科との連携のもと、国内に類のないセンター病院としての重責を果たしている。リハビリ部門では、重症未熟児網膜症や先天眼異常を中心とした重度の視覚障害児、重複障害児に対して、国立特殊教育総合研究所や全国の教育・療育機関と連携して乳幼児期からロービジョンケアを実施している。

診療面での特記事項として、専門的検査や多種多様な器械を用いる眼科診療の特殊性のため、院内の電子カルテと連結する眼科ファイリングシステムを全国に先駆けて設立した。

研究面では、小児眼疾患に対する各種臨床研究のほか、研究所成育遺伝研究部、他大学や研究所など多施設と共同で眼遺伝、遺伝子治療、発生、再生に関する基礎研究を進めている。また小児眼科領域の専門的教育機関として種々の大学から研究生を受け入れている。

本年度の眼科スタッフの構成は医長1、医員1、レジデント1、視能訓練士3（常勤2、非常勤1）、研究員（医師）4、研究員（視能訓練士）2、私設秘書（視能訓練士）1、その他不定期に各機関から研修生の参加があった。

### 診療活動、研究活動

#### (a) 診療

外来診療は午前は初診医1名、再診医2名（木曜は医長再診枠のみ）による診療体制で、午後は外来・入院患者の特殊検査を主に行っている。月、火、水、金は外来予約可能患者数33、木は43であるが、平均1日50～80名の診療となっている。眼科手術目的での入院患者数は約7～10名、在院日数は約2～14日である。NICU病棟における未熟児回診を木曜午後、月曜午後を実施しており、平均患者数10～15名である。重症未熟児網膜症を発症してレーザー治療を要する症例数が増加しており月平均5名に及んでいる。更に多施設からの救急搬送による未熟児網膜症の外来診療が増加している。コンタクト外来は隔週火曜日午後実施している。ロービジョンケアは通常の診療と同じ日にリハビリ部門ロービジョンケアルームで実施している。早期視機能評価の後、養育・教育相談、地域の視覚障害児教育機関や福祉の情報提供と連携、視覚補助具の選定と指導を主に行っている。

#### (b) 手術・全麻下検査

全麻手術・全麻検査・局麻手術はデイケア、入院ともに月、水、金に実施している。予定手術、緊急手術を含めて週に6～10件の手術数である。このうち重症網膜硝子体疾患が半数近くを占めており、未熟児網膜症例ではほぼ全例に術後ICU管理が必要とされる。外来における診療や管理が困難な小児の緑内障、網膜硝子体疾患、網膜芽細胞腫などに対しては精密な診断と治療を目的に全麻下検査を実施している。

#### (c) 研究

臨床研究は小児眼疾患の診断・検査・手術・リハビリをテーマにしている。基礎研究は、眼遺伝、遺伝子治療、発生・再生について、研究所成育遺伝研究部、東京大学、東京工業大学、奈良先端科学技術大学院大学、国立精神神経センター、杏林大学など多施設と共同で進めている。

また、公費によって行った研究事業は以下の通りである。

- (厚生労働科学研究費補助金感覚器障害研究事業)
  - 小児・若年者の難治性網膜疾患の原因と治療に関する研究(主任)
  - 視覚障害の早期発見と評価法に関する研究(分担)
  - 難治性感覚器疾患の遺伝情報網および遺伝子診断システムの確立(分担)
- (厚生労働科学研究費補助金ヒトゲノム・再生医療等研究事業)
  - 幹細胞と形態形成遺伝子を用いた眼組織の再生と修復に関する研究(主任)
  - 器官・組織の形成不全症の責任遺伝子からの発症機能の解明と再生医療への応用(分担)
- (厚生労働科学研究費補助金がん克服戦略研究事業)
  - 小児がんの遺伝的・発生生物学的特性の解明と診断の応用(分担)
- (成育医療研究委託事業)
  - 再生医療の臨床的応用に関する研究(分担)

## 研修

慶應大学、杏林大学、国立特殊教育総合研究所視覚障害教育部などから臨床研修を受け入れた。診療とともに、電子カルテ 眼科ファイリングシステムに関して多くの見学があった。



眼科データファイリングシステム



手術室における全身麻酔下検査